編集者

古山登

昨年の新年号で劇画週刊誌『少年ジャンプ』が史上空前ともいうべき四百二十万部を発行し、話題になったものだったが、さて、今年はどうだったのか、興味があったので訊いてみたら、四百五十万部ということで驚かされた。

しかも、売上率九八%（推定）販売所の約八〇%が品切れを訴え追加配本を要求してきたということを聞いて、二度驚かされた。

出版社、殊に雑誌では発行部数の設定に最も神経を使う。多ければ多いが好いのに決っているが、返品が多くては元も子もないからである。書籍なら再出荷という方法があり、長期に販売することもできるが、雑誌の場合は月刊であれ週刊であれ、一旦返品されれば単なる屑紙に過ぎない。

中でも、十万単位以上の部数を発行しなければメリットの少ない週刊誌や娯楽誌にとって、この問題は大きい。仮りに返品率二割といっても、発行部数一万の文芸誌なら二千部に過ぎないが、三十万部の娯楽誌なら六万部、四百五十万部の『少年ジャンプ』なら九十万部という尨大な紙屑が生産される結果になるからだ。

だから、部数の多い雑誌ほど部数決定は慎重審議される。いかに読者の反響が大きくても刷り過ぎでは返品の山を築く結果になる。一方、返品を恐れて部数を少なめに見積ってはせっかくの販売チャンスを逸してしまう。極く稀に例がないではないが、雑誌は、増刷の利く書籍と違って、その月その月、その週その週一回きりの勝負になる。

『少年ジャンプ』にしても例外ではなく、同種誌としては後発し、十万部単位で手探りしながら部数を伸ばして先発誌を抜き、やがて百万雑誌となり、さらに二百万という記録的な部数を出して出版界を驚かせ、その後も着実に読者を増やして三百万を超え、遂に今日の四百五十万という驚異的な数字を記録するに到る過程で、その都度どんなに激しい論議が交わされたかは想像を超える。

といって、私は、ただ発行部数の大きさだけを讃嘆するのではない。

世に、百万雑誌と謂われた雑誌は幾らもある。戦前の『主婦の友』『婦人倶楽部』をはじめ戦後の『文藝春秋』『週刊朝日』『週刊新潮』『週刊女性自身』等の週刊誌、『平凡』『明星』等の娯楽芸能誌等はいずれも百万を

超える部数を誇った一時期を持っているし、休刊になった『リーダース・ダイジェスト』は二百万部を超え三百万部に近づいた時期もあったと聞く。

が、私は長い間これらの〝百万雑誌〟を、『文藝春秋』等の一部を除いては多くの読書子がそうであるようにマイナー視してきたものだ。

勿論『少年ジャンプ』に対しても例外ではなく、その延長として、それらの雑誌の編集に携っている人々を一段低い存在と見做してもいた。思想も理念も問題意識もなく、極端な言い方をすれば大衆に迎合するだけに専意して会社に益することはあっても社会を益することのない俗悪ジャーナリストというふうに接してきたものだった。

ところが或る日を機に私の考えが変った。もう十年も前のことであるが、城山三郎氏から急に会いたいと言ってきた。

城山氏とはかなり古い交際(つきあい)であったが、城山氏の方から会いたいと言ってきたのは初めてのことであった。

会ってみると「翌年放映されるＮＨＫ大河ドラマ『黄金の日々』を『少年ジャンプ』で劇画化してもらいたい」という話であった。

何でも、笹川良一氏の主宰する団体から高額な金額でこの作品の劇画化権をゆずってほしいとの申し入れがあったが、自分としては『少年ジャンプ』にゆずりたい、金額などはどうでもいい、という好意的な申し出であった。

ＮＨＫの大河ドラマといえば最高の宣伝媒体になる。これが劇画化されて連載されれば掲載誌の部数増加は確実に約束される。

私は意気揚々と『少年ジャンプ』の編集室を訪れて、中野（祐介）編集長に城山氏の申し出を伝えた。きっと大感謝されるに違いない……。

ところがどうだ、見事に断られたのである。「御好意は誠にありがたいのですが」と云った後つづけて「ウチの編集方針には合わないんで」と彼は云った。

たかが少年劇画誌にそんな御大層な編集方針なんて、思ってもみなかったが、つづく言葉を聞いて私は恥じた。

『少年ジャンプ』は創刊以来、あやかり企画（今回の場合はこれに該当する）はいっさいやらない。他誌が育てた画き手にはいっさい執筆依頼をしない、つまり、オール・オリジナルの自前で行くことを厳守している、というのであった。

もともと好漢として好感を持っていた中野君を、私はあらためて見直した。そして、爾来『少年ジャンプ』を視つづけるようになった。そして四百五十万部。

『少年ジャンプ』がこの先さらに部数を伸ばすかどうかは分らない。多分難しいだろうし、むしろいかに部数を維持するかに頭を痛めることだろう。或いは競争誌の厳しい攻勢に遭って苦しい立場に追い込まれるようにならないとは限らない。

極言すれば、時の流れと会社の政策によって休刊することだって考えられないではない。それは発行部数のみに頼る娯楽誌の宿命である。

しかし、私は、この少年劇画誌が編集方針を堅持する限り、この雑誌を支持し、いっそうの発展を祈念したいと思っている。

また、中野祐介君は、単なるサラリーマン編集者として出版史に残ることもないだろう。

しかし、私は、中野君や『少年ジャンプ』編集部をジャーナリズムの本義に生きる編集者として讃えたい、と思っている。